

聖書：使徒 18：1～17

説教題：この町にいる多くの民

日時：2014年5月11日

パウロはアテネを去ってコリントへとやって来ます。コリントはヨーロッパ大陸とペロポネソス半島の付け根にあり、陸上の交通・海上の交通両方の中継点として人々が集まって来る商業と経済の中心的都市でした。またこの町は不道德な町としても有名でした。アフロディテ神殿という女神を祭った丘には、1000人もの神殿娼婦が旅人を迎え入れ、子授けと安産を祈願する祭りが盛んに行われていたようです。そのため、「コリント人」という呼び名で「不道德な人たち」を意味し、「コリント風に振る舞う」は「不品行な行ないをする」を意味するほどだったそうです。

さて、この町にパウロはどんな気持ちで到着したのでしょうか。1コリント2章3節：「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。」パウロのこの時の状況を考えるなら、ある程度のことが分かると思います。パウロは幻の中で一人のマケドニア人が「マケドニアに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願するのを見て、ヨーロッパへ渡って来ました。しかしそれ以後の宣教は彼の期待したようには進みませんでした。ピリピでは川岸にいた女たちに話しかける程度で、まもなくパウロたちは騒ぎが起こって逮捕され、むちで打たれて、牢屋に入れられました。またテサロニケでも暴動が起こり、ベレヤへ送り出されました。またそのベレヤにはテサロニケのユダヤ人が追いかけて来て、パウロたちはマケドニア地方から追い出されてしまいます。そうしてアカヤ地方にやって来ましたが、アテネでは一生懸命福音を伝えたものの、当時の知識人・文化人にあざけられ、軽くあしらわれただけでした。パウロはこれらのことのゆえに、このコリントに少なからず気落ちしながら入って来たのではないのでしょうか。

しかしこのコリントでパウロは良い導きを受けます。その一つはアクラとプリスキラ夫妻と会ったことです。この夫婦はユダヤ人のクリスチャン夫婦でした。クラウデオ帝が出した退去命令によって、ローマからコリントへやって来た人たちでした。この夫妻はパウロと同じ背景、同じ信仰を持つだけでなく、同じ職業についている人たちでもありました。パウロは彼らと一緒に家に住んで、一緒に仕事をします。それはこの時の彼にとって何という励みだったでしょう。

二つ目の良い導きは、シラスとテモテがマケドニアから帰って来たことです。彼らはまず良いニュースをパウロに届けてくれました。1テサロニケ3章6～10節：「ところが、今テモテがあなただがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなただがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました。あなたがたが主であって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。私たちの神の御前にあって、あなたがたのことで喜んでいる私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな

感謝をささげたら良いでしょう。私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。」 さらにシラスはピリピ教会からの献金を持って来てくれたものと思われます。ですからこの後、パウロはみことばを教えることに専念できたのです。

こうしてパウロはいよいよ本格的にコリント宣教に献身します。5節にパウロはイエスがキリストであることをユダヤ人たちにはっきり宣言した、とあります。すなわち歴史に現れたあのイエスが、旧約聖書に預言されて来たメシヤ、キリストであると論証します。しかしここでもユダヤ人たちが反抗し、パウロに向かって暴言を吐きます。そこでパウロは、これからは異邦人の方に行く！と宣言します。これまでと同じパターンです。そしてどこへ行ったのでしょうか。7節に、「そこを去って神を敬うテテオ・ユストという人の家に行った」とあります。その家は何と会堂の隣でした。そこがパウロのこの後のコリント宣教の拠点となったのです。

さあ、そこでの宣教はどうだったでしょう。まず会堂管理者クリスポが一家をあげて主を信じます。この人は隣のユダヤ人の会堂の管理者です。彼は先に会堂でなされたパウロの説教を聞いて信仰に入ったのでしょうか。あるいは隣のテテオ・ユストの家でなされたパウロの説教が会堂にも聞こえて来て、その内に信仰に入ったのでしょうか。そうだとしたらユーモラスな話です。とにかく重要な立場にある人が一家をあげて信仰に入りました。さらに多くのコリント人も信じ、バプテスマを受けたとあります。アテネとは対照的にここでの宣教は豊かに祝福されたのです。

さてこんな中で今日の箇所を中心となる主イエスの言葉がパウロに語られます。9～10節：「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた。」主はここでパウロに「恐れるな！」と言われました。パウロは何を恐れていたのでしょうか。はっきりは書かれていませんが、主の言葉の中に「だれもあなたを襲って、危害を加える者はない」と言われていることからすると、第一に恐れていたのはユダヤ人からの攻撃あるいは復讐だったと思われます。確かにコリント宣教は祝福されています。しかし祝福されるとユダヤ人がねたんで復讐的行動に出るというのは、これまでいつも見られたパターンです。しかも今回はユダヤ人の会堂の隣で宣教しています。すでに会堂管理者が信仰に入りました。そしてこれまで会堂に足を運んでいた人たちが、同じ道を通りながら会堂ではなく、テテオ・ユストの家に入って行くのを信じないユダヤ人たちは見ていたことでしょうか。ですから彼らがいつ怒りを爆発させ、大変な行動に出るか、そしていつ自分はこの町から出て行かなければならなくなるか、とパウロは案じていたのではないのでしょうか。この時のパウロは、先に見たように落ち込みやすい心の状態にありました。コリントの町に入って来た時からそうでした。主の励ましをいくつか頂いても、すぐに弱く、恐れおののく心身の状態に逆戻りしそうであったとしてもおかしくなかったでしょう。

そんな彼に主は「恐れなくて語り続けなさい。黙ってはいけない。」と言われます。そしてこの命令に従うことができるための励ましを二つ語られます。その一つは「わたしがあなたとともにいるのだ。」という約束です。これはこれまでも多くの聖徒たちに語られて来た主の励ましです。主がパウロとともにいてくださるので、誰もあなたに危害を加える者はない、と言われています。パウロは一人ではないのです。

そしてもう一つの約束は「この町には、わたしの民がたくさんいるから」というものです。パウロはおそらく、コリントでの宣教をいつ終わりにしようかと考えていたのではないのでしょうか。もう救われるべき人はあまりいないだろうし、そろそろ次の町に移っても良いのではないかと。しかし主はそうでないと言われます。あなたには見えていないかもしれないが、まだまだわたしの民がこの町にはたくさんいると主は言われたのです。

これは伝道と神の選びについて重要なことを語っている御言葉だと思います。イエス様が言われた「わたしの民」とは、福音を聞いてこれから信じる人たちのことを特に指しています。パウロの目にはもうそのような人はほとんどいないのではないかと思われましたが、神の前ではそうでなかった。すなわち神は救われるべき人たちを前もって用意してくださる。私たちが自分の力で人々を回心させ、神にささげるのではないのです。神がご自分の民を選び、福音を聞いて信仰告白に至るように用意しておられる。この神の選びあるいは神の予定が先にあるからこそ、私たちの伝道は空しく終わらないのです。必ず実を結ぶという保証と確信を持って私たちはこのわざに当たることができます。パウロはこの励ましによって一年半、ここに腰を据えて伝道しました。いつここを去ろうかと心の定まらなかった彼は、この主の御言葉に根ざすことによって粘り強い伝道ができたのです。

最後の 12～17 節のエピソードは、主の約束の成就を記している記事と言えます。ここにガリオがアカヤの地方総督であった時とあります。このガリオはパウロがコリントで宣教してから数カ月後に総督として赴任して来た人のようです。新しく赴任して来た役人は、まずその地の住民と良い関係を築くことに心を向けるでしょうから、ユダヤ人たちはこの時こそ、パウロを訴えるには打ってつけの時であると考えて、パウロを法廷に連れて行ったのでしょう。

ところがガリオは、パウロが弁明するよりも先に口を開き、私はこの訴えには関わり合えないと宣言します。彼いわく、もし不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然あなたがたの訴えを取り上げてもしよすが、これはあなたがたの宗教内部の争いに過ぎない。あなたがたはパウロという人が自分たちの考えと合わないから訴えているだけであって、それはローマ帝国にとっては何の問題にもならないことである。従って私には何ら関わり合う必要のないことである、と。この結果、パウロはユダヤ人の攻撃から守られます。そればかりか、この判断が以後のローマの判例となって、キリスト教は十数年以上、妨げられずに福音を宣べ伝えることができる基礎にさえなったのです。これはまさに 10 節の主の約束の成就です。ここで思うべきは、ガリオは別にパウロの味方であったわけではないということです。彼はただ、うるさいユダヤ人たちを嫌ってこのように述べただけです。そんな彼を用いて、主はパウロを守ってくださったのです。全く思いもかけない方法で主はご自分に属する者をきちんと助けてくださったのです。私たちはこのような不思議な御手を持つ全能の主を、共にいてくださるお方として持っている者たちです。

私たちも日々、主のために歩んでいます。ローマ書 14 章に、「私たちの中でだれ一人、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。」とある通り、この世での遣わされた場での働きにおいてもそうですし、教会での働きにおいてもそうです。その中で私たちはパウロのように困難にぶつかり、恐れに囲まれ、疲れを覚え、気落ちしてしまうこ

とがあると思います。肉体的にも靈的にも弱く、恐れおののく状態に落ちる時があるでしょう。そんな私たちに、主は今日の御言葉を語ってくださいます。「わたしがあなたとともにいるのだ。」と。私たちは私たちの戦いにおいて一人ではないのです。復活の主が私たちとともにいてくださいます。私たちのために十字架にかかり、死にさえも勝利された主です。その主がガリオさえも用いる奇しく大きな御手を持って私たちを守り支えてくださっています。そしてさらに主は良い御心をきちんと持ってくださいます。私たちに先のことは見えません。ですから苦しいことに直面すると、もう終わりではないかと思えます。あきらめた方が得策ではないかと思えます。しかし主はなお忍耐して今の働きを続けるようにと今日の箇所でおられるのではないのでしょうか。その先にわたしは良い実りを用意しているのだからと。特に主はここで宣教についてこのことを言われました。宣教のわざに仕える時、様々な困難にぶつかります。私たちを気落ちさせる色々な状況があります。しかし主は勝ち取るべき結果を、その先にすでに用意しておられます。ですから私たちのなすべきことは、主に信頼して、与えられた務めを忠実に主の前に果たして行くことです。この主のお言葉を頂いて、私たちも主の御国のための働きに粘り強く仕えて行きたいと思えます。主は約束してくださっています。私たちの日々の戦いのただ中に、ご自身がともにいるということ。